めない事件です。異様な情景に町の人たちは、悪霊が取り払われたことを喜ぶわけでもなかったのです。

悪霊の告白

ここでは、悪霊の方が主イエスを「神の子」と認めています。悪霊にとって、むしろ主イエスははっきりした存在です。主イエスは神の子として、悪霊に力を持っておられるからです。

ガラテヤの信徒への手紙四章三節に「同様にわたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました」とあります。「世を支配する諸霊」について語られます。この世界に影響を与えている、様々なところに巧妙に染み込んでいて姿を見せない力を持ったものです。

むしろ今、世を支配する諸霊の存在が切実に感じられる時になっています。納得の行かないことと説明のつかないことに満ちています。なぜ今という疑問に満ちています。それは、ただ疑問というのではなく、人の命が奪われ、犠牲が絶えないのです。なぜこのような戦争が起こり、なぜ止められないのか、なぜ今この疫病が世界を覆うのか。

世を支配する諸霊の言い知れない力を思わせられるのです。疫病や戦争と普通の人なら誰も望んでいないことに世界が弱り、傷つき振り回されている。その理由も解決も見えていないのです。その正体を見極めることも、乗り越えることも難しいままなのです。

しかし、ここでは悪霊の方が、主イエスが「神の子」であることを認めています。それは、主の支配が悪霊に力を及ぼすことができるからです。

主の支配

主の支配は、人間に自分を取り戻させるものです。人間は自分だけで自分を取り戻すことはできません。本来人は神と共にあって人間らしく生きるからです。主の支配に信頼することは、自分を取り戻すことになるのです。

この悪霊に捉われた人たちに向かった主は山上の説教を語られた方でした。そこで主イエスは天の父なる方の御支配を語られています。そこでは「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。…今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。」(六章二五～三〇節)と教えられました。

神に信頼して、神の支配を受け入れることで人は自分を取り戻すのです。

父なるお方にあって生きるために、わたしたちにできることは祈ることです。祈りは父である神を信頼して、その方に委ねることです。主イエスは祈りを与えてくださいました。「だから、こう祈りなさい。」(六章九節)と言われて主の祈りを教えました。それは「天の父よ」と実際に神を父と呼ぶ生き方です。祈りは世を支配する諸霊の入り込むすきのないものです。主によって祈れるようにされたのですからわたしたちは祈りを失ってはならないのです。

(五月二二日　公同礼拝)

四月講壇一覧

第一主日(四月三日)　公同礼拝　高橋和人牧師
「思いを負い、病を担い」
イザヤ五三・一～一二
マタイ八・一四～一七

第二主日(四月一〇日)　棕梠の主日礼拝　姜徑米牧師
「主イエスの祈り」
イザヤ五三・一～一二
マルコ一四・三二～四二

第三主日(四月一七日)　イースター礼拝　高橋和人牧師
「復活と再会」
イザヤ三五・一～四
ルカ二四・一三～三五

第四主日(四月二四日)　公同礼拝　姜徑米牧師
「最高の道、愛」
詩編一六・七～一一
コリントⅠ一二・三一b～一三・七

五月講壇一覧

第一主日(五月一日)　公同礼拝　高橋和人牧師
「宿りの地」
詩編九〇・一～六
マタイ八・一八～二二

第二主日(五月八日)　公同礼拝　高橋和人牧師
「この人は誰か」
詩編一六・七～一一
マタイ八・二三～二七

第三主日(五月一五日)　公同礼拝　姜徑米牧師
「最も大いなるもの」
詩編九六・一～三
コリントⅠ一三・八～一三

第四主日(五月二二日)　公同礼拝　高橋和人牧師
「かまわないでくれ」
列王記上一七・一七～二四
マタイ八・二八～三四

第五主日(五月二九日)　公同礼拝　姜徑米牧師
「預言と異言」
詩編二九・一b～二
コリントⅠ一四・一～一九